

イギリス視察記録

～若者支援現場を訪ねて～

2012年9月

静岡県立大学国際関係学部4年 YEC(若者エンパワメント委員会) 若林勇太

イギリスにおける若者政策を学ぶため、2011年5月～2011年11月の6か月間、イギリスのロンドンのNew Horizon Youth Centreにてインターンシップを行い、それと同時にユースワークを中心に、若者支援機関やその取り組みを訪問し、ヒアリング重ねた。この資料では、ヒアリング記録の写真を交えて紹介する。以下訪問先リストになる。

カテゴリ	訪問先	先方	日程	URL
ユースセンター	Bollo Brook Youth and Community Centre	Lauren Daley (Centre Manager)	7月28日 (木)	http://www.youngelaling.co.uk/group-acton-bollo.html
	Salmon Youth Centre	Marcus Senior (Youth Work Manager)	10月12日 (水)	http://www.salmoncentre.co.uk/
	Kentish Town Community Centre	Metthew Fox (Youth Project Coordinator)	11月2日 (水)	http://www.ktcc.org.uk/
ユースワークの教授	University of East London	Camelia Baugh (Senior Lecturer)	8月4日 (木)	http://www.uel.ac.uk/cass/staff/camelibaugh/
ユースワーク・若者支援の中間支援組織	Partnership for Young London	Helen Hibbert (Strategic Director)	10月25日 (火)	http://www.partnershipforyounglondon.org.uk/
	London Youth	Esther Thompson (Head Training)	11月15日 (火)	http://www.londonyouth.org.uk/
若者の参画を進める取り組み	Duke of Edinburgh	Daniel Murray (Duke of Edinburgh's Award Officer)	9月13日 (火)	http://www.dofe.org/
	Youth Action Group	Sam Childs (YOF Coordinator)	10月18日 (火)	
	Camden Youth Council	Rashid Ali (Youth Council Operational Support Co-ordinator)	10月26日 (水)	

■ユースセンター

1. Bollo Brook Youth and Community Centre

【概要】

ロンドンのサウスアクトンにあるユースセンターで、13歳から19歳の若者を対象にメディアアートやデジタルアートなど、主に芸術系の活動に特化しており、他の若者組織とも連携を取りながら不登校などの若者に向けて昼間もプログラムを提供している。その他にもアドバイス、ガイダンス活動、社会的・教育的・余暇的な活動も提供している。



【センターの外観】

参画のプログラム

このセンターでは、ローカルカウンセラーを誰にするか若者に意見を聞いたり、少ない予算の中でどのようにこのセンターを管理するのか、このセンターで行うプログラムに関して、若者に意見を求めるワークショップを行っている。このように、若者の声を聞くという事はとても大事。なぜなら、もし若者がこの社会に参加していなかったり、貢献していると感じていなければ、社会に対してパワーを発揮するという気持ちにならず、この社会に対して反抗的になりうるから。

ユースワーカーとして大切にしている考え

簡単にジャッジしない。すべての若者をグッドだと信じる。どんなプロジェクトを行うにも若者の安全性を重視する。若者に正直であること。若者は成長する可能性を秘めている。時に彼らの人生の中で何かしらの困難が起こるが、若者が助けを必要としている時にサポートする。1年などの長い期間かかる場合もあれば、短い期間で終わる場合もある。

地域との関わり

時々地域を巻き込んだ活動を行う。例えばスポーツやゲームやバーベキューなどを子供や家族、地域の人を招いて行う。問題を抱えた地域の解決に向けて、若者と一緒に取り組む事もある。

地域において若者に関連する意思決定がされる時、そこに巻き込む。例えばこの施設を新しく作り変える時に、このような施設は嫌い、これはどう思う等の意見を求めた。これらは地域にも若者自身の発達にも良い事。また、時々警察が挨拶をしにここに来る。ここはコミュニティーで、隔離した場所ではない。地域の人と関係性を築く事は良い事。

シティズンシップ

シティズンシップを育むには可能性を引き出したり、責任を引き受ける、意思決定の方法を考える機会を提供する必要がある。このセンターにはそのように直接的にシティズンシップを育む機会はないが、ボランティアワーク、若者がワークショップを企画したりするなどしてシティズンシップは育まれている。イギリスには多くのシティズンシッププログラムや学校でのシティズンシップ教育がある。

移行期を支える重要性

11歳から19歳の若者というのは、脳や体が発達する時期で、責任や権利なども成長するにつれて大きく変わってくるので、この時期は非常に傷つきやすい時期だと言える。何かを選択したり、決める時もその行動の結果をよく考えずに行う場合が多いので、彼らの生活の一部をサポートする事が大事。また、移行期は、楽しさや探求、アイデンティティーの発達が必要で、今までと異なる心理的な変化も現れる。しかし彼らの多くは十分な支援を受けられず難しい時期を過ごすことが多い。彼らのエンプロイアビリティ(雇用される能力)を高める事も重要だが、そのためには心理的な側面など人間発達において重要な側面をサポートする事が重要。そうしなければ雇用される能力には繋がらない。

ユースワークの成果

若者が身に付けたスキル、自己肯定感、自尊感情、活動やコミュニティー中でどんな役割を果たして貢献したか、抱えている問題の解決に向けてどんな取り組みをしたか等が成果になる。

何か活動を終えた際に成果指標を示すフォームをユースワーカーと若者で一緒に記入する。親がユースセンターに来てそれを見て、「あーうちの息子はこんな事を学んだんだ。」というやりとりがある。

ユースワーカーとしての生きがい

若者の生活にポジティブな違いを作り出す事である。時には貧しさや家庭問題、ホームレスなど困難な状況に置かれている若者もいるが、時が経った後、幸せな彼ら、例えば仕

事を楽しんでいたり、家族ができていたりするのを見るととても幸せになる。

■ユースセンター

Salmon Youth Centre

【概要】

バーモンドジーにある4階建てのユースセンターで、とても大規模。活動も多岐に渡り、スポーツ、アート、プロジェクトワーク、ボランティアがあるが、一番の売りはスポーツ活動。ジム、ダンス、クライミング、トランポリン、体育館などの施設が完備されている。8歳くらいから19歳くらいまでの若者が利用をでき、時間帯によって年齢を区切っている。利用者数は1週間で450人程度。



【Salmon Youth Centre の外観】

プロジェクトワーク

プロジェクトワークはショートタームの4週間とロングタームの3ヶ月または6ヶ月がある。これは若者のニーズややりたい事を表現したものが企画になる。例えばリサイクルプロジェクトや映画プロジェクト。これは若者のニーズに基づくが、それとともに、若者に影響を与える社会的問題について、これらに取り組むような企画にするようにしている。例えば、健康の問題、いじめ、ナイフ、など。こういった取り組みがないと、若者は社会の中に包摂されていないと感じているかもしれない。なぜなら、このセンターに来る若者の中には、雇用や教育に就いていない人もいるから。だから彼らをモチベートし、社会に積極的に関わっていきたくて思ってもらえるように、そして雇用に繋がるように支援している。最初は社会的に排除されている状況にいた若者や、社会の一部だと感じていなかった若者が、このような経験を通して、彼らの考え方、ふるまい、社会の中でどういった

役割を果たしていくかを考えていくようになる。そして実の所、社会的問題に取り組むプロジェクトの方がたくさんお金をとれる。

模擬選挙

1か月に1度その月に1番頑張った若者を表彰する取り組みがある。ユースワーカーが何人かピックアップし、それを若者が選ぶ。判断の基準として、若者がその月に達成した情報が書かれた投票用紙を配り、それを基に他の若者は選ぶ。選ばれた若者は表彰状をもらい、写真がセンターに飾られる。政治的な活動・意思決定の機会に若者を巻き込むため、このような活動を行っている。これによって、若者は早い段階で社会が何を期待しているか理解できる。普通の選挙とは違い、私たちはこれを若者の“達成”を祝う活動として行っている。若者には他の仲間を支える、そして選挙の考えを得てほしいという観点からこのプロセスへの参加を促進している。



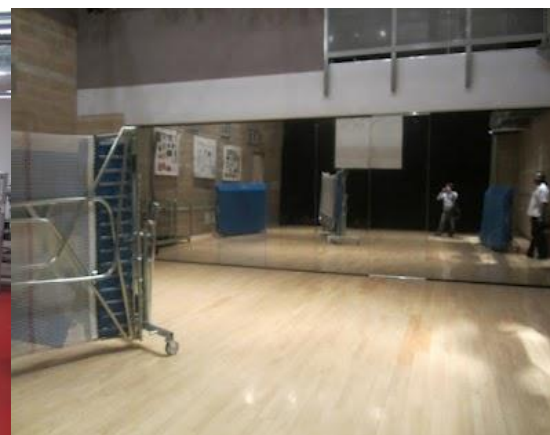
【工芸室】



【自転車のプロジェクトワークの作品】



【ジム】



【ダンスホール】

■ユースセンター

3.Kentish Town Community Centre

【概要】

ケンティッシュタウンにある、若者も地域の人でも利用するコミュニティセンター。音楽、ボクシング、アート、卓球、ヨガなど、利用者のニーズに合わせてまんべんなく活動を提供している。

センターが始まった背景

ここは元々コミュニティセンターだった。しかし、ユースセンターとしての機能を 2004 年から持ち始めた。この年に、職員の一人がユースプロジェクトを始めた。その理由はケンティッシュエリアの若者がナイフで人を殺してしまう事件が起こったから。このエリアの若者はとても荒れており、若者に向けての活動や居場所の必要性があった。だから最初に街へ出て行って若者対象のアンケートをとり、「何かした事はあるか？」等を若者に聞いた。そしてこのアンケートをもとにユースプロジェクトを開始した。アンケートの結果、ほぼ 100%の若者が、もしユースセンターができれば、ぜひ利用したいと答えた。だから、ただ若者に活動を提供しているのではなく、彼らもその活動の形成に関わっていて、現在も若者が何をしたいかを決めたり提案したりできるように試みている。これが始まりで、以来たくさんの若者が来て、徐々に政府がお金を提供してくれるようになり、従業員を雇い始め、より特定の活動を提供できるようになった。そして 2 年前に National Lottery からお金を得て、今は、より多くの若者を巻き込むために、施設を作り変えている段階にある。

対象の若者・地域の問題点

ジェネリックユースプロビジョンと呼んでいるが、誰にでも開かれたもので、13~19 歳の若者であればすべて平等の機会を与えるという理念でサービスを展開している。文化、障害、性別、宗教に関係なく。

この地域の若者は社会的に多くの剥奪を受けてきた。いわゆるワーキングクラス。家が共有であったり、親が仕事についていなかったり。他の特徴としてお金持ちの家が困窮者の家の隣にあったりする。だから、社会的な剥奪は多いがお金持ちも混ざっているというなんだか奇妙な街である。しかしここに来る若者のほとんどはワーキングクラスで、犯罪やドラッグやアルコールなどのリスクにさらされている若者が多い。だから同時にターゲットアプローチも提供している。しかし基本はジェネリック。その理由は、様々なニーズを持った若者が来るので、そのニーズに応えるため。セクシャルヘルスやドラッグ、1対1の相談など、活動は多岐に渡る。

地域の大人も関わることによる難しさ

何人かの大人は若者を恐れる傾向があり、若者は若者以外の人に話しかけない傾向がある。そして若者は自分の事しか気にしない傾向がある。これを変えようと統合を進めようとしているが、なかなか実現していくのは難しく、実際には統合ではなく分離が見られる。

ストリートフェスティバルで若者と大人が一緒になって店を出したり、洋服を作ったりと活動世代間の交流を促進する活動を行っている。ここでの大人の定義は20歳以上。20歳以上であればだれでも来てよく、キックボクシング、マッサージ、英語のレッスン、ガーデニングなど大人向けにもやっている。しかし正直に言うと、20代・30代の若い大人はここにはあまり来なく、利用者の中心は高齢者である。

ユースワーカーとしての生きがい

若者たちの積極的な変化を見る事。若者たちは次の世代を担っていくから。私がユースワーカーになったのは、私は幼少期に教会でのユースワークグループに所属していて、ユースワークの経験と共に成長してきて、それが私に良い影響を与えてくれた。恩返しの意味も込めて、ユースワーカーを職業にしている。



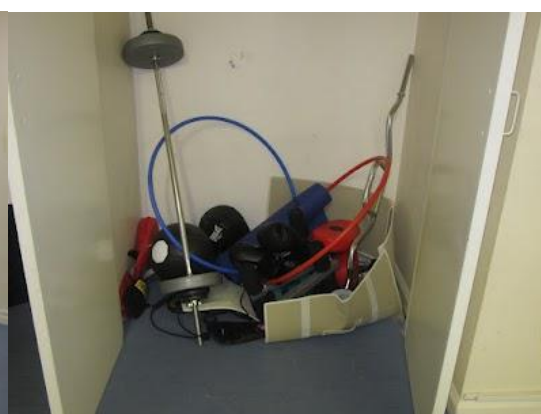
【壁に直接描かれた絵】



【パソコンルーム&溜まり場】



【多目的ホール】



【ボクシングセット】

■ユースワークの教授

Camelia Baugh

【概要】

イーストロンドン大学で Youth and Community Work を教えている教授。教授になる以

前には、ユースワーカーとしてアート・ファッション・困難を抱えた若者等を対象に活動をしてきた長い歴史を持つ。

社会的状況とユースワーク

若者をサポートする事は今日においてとても困難な状況にある。なぜなら社会は常にサポートをしてくれるわけではないし、イギリスでは政策は常に変わっていくから。だから、行っている活動と、若者のニーズをリンクさせる必要がある。アクティビティはあってもそれが若者のニーズに結びついていない場合がある。その点で、ユースワークはホリスティックであることを考えるべきだが、ニーズに応えるという点でターゲットでもある。

ユースワークの価値の変容

ユースワークの価値は変化してきている。1970年代に私がユースワークを始めた頃は、家の外に出て楽しい事やろうよというような、楽しさに基づいたアクティビティが多くあった。80年代にはユースワークはカリキュラムを持ち始めた。しかしカリキュラムを持つ事はまるで学校のようにつまらなくなると反対の声が多かった。カリキュラムを持つために構造化する必要があった。カリキュラムを持ったらどうやって柔軟な手法を提供するのだろうか。

今やユースワークはすべてにおいて成果を示さなければいけない。ハードは測れるが、ソフトの部分、例えば若者が自己肯定感を得たというのをどうやって測るのか。あるプログラムで、20人が参加したなど測るのは簡単であるが、ソフトは難しい。しかしユースワークはソフトが大事。音楽の大会に出て歌うアクティビティでどうやってその人の中に生じた変化を測るのか。これがユースワークの抱えるジレンマである。しかし今日ではそれを測るようになってきている。評価はとても難しい。

記録とネットワーク

資金を提供してもらえようにするために、プログラム1個1個にしっかりと参加の記録をつけなければならない。ふらっと立ち寄って、お茶しただけでは参加にならず認めてもらえないから。Management Information System(MIS)に上記のような記録のデータ入力をする。

センターが提供している活動のリストを見せ、「あなたが何に興味がある？」と最初に聞く。ただ、各センターごとにミッションステートメントがあるので、やれる事は限られる。だからもし若者がセンターに来てそこでの活動に興味がなかった場合、他のサービスにつなぐ。すべてのサービスを同じように提供する事はできないし、従ってユースワークにおいてネットワークは非常に重要になる。若者をホリスティックにサポートするネットワークを構築する事を確実にしなければいけない。

自発性

ユースワークは自発性を大事にする。何か大きなプロジェクトやパッケージを提供する前に、まずは若者との関係性を築かなければいけない。だから例えば Duke of Edinburgh(詳しくは若者の参画を進める取り組みを参照。以下 DofE)のようなプロジェクトは、若者が途中で来なくなるような事態が起こる。DofE は確かに有名で、簡単で素早く終わることができ、成果も見えて、よくやりましたねとなる。しかしそれはユースワークの美しさを失わせる。なぜなら、「ここに来てこれをやれ！あれをやれ！」となるから。このような参加が流行すると、まるで学校のカリキュラムをやっているようになってしまう。

社会参加の重要性

若者を自分たちは一部なんだという気持ちにする事は重要。そして若者が望むやり方で参加を見つけること。若者を意思決定の機会に巻き込むためには、今若者に起こっている事に関して社会からの広い認識を得なければいけない。これが真実であると。政府からの支えも必要。そして当事者を巻き込んで政策を作らないといけない。そうしないと、例えば政策を作っても、当事者が無視されたり、政策を知らなかったで終わってしまう。

関係性の構築

ホームレス、ドラッグ、HIV、雇用につながるようなプロジェクトワーク、インフォメーション、ガイダンスなど様々なタイプのユースワークが提供されているが、どんなタイプの活動でもまずは関係性を作ることが最初に来る。

ユースセンターでアートプログラムを行い際にアートチューターを雇ったことがあった。その時そのチューターはただアートを教えて、若者たちが飽きて別の事をし始めたら厳しく叱り、コントロールした。これでは駄目で、ユースワーカーは若者の事を理解して、ユースワークのコンセプトに基づいて若者と接するべきであるから。フットボールでも、フットボールクラブではただサッカーを教えるだけだが、ユースワーカーがこれを行う際は、そのプログラムの中でふるまい、態度、目標などを達成していく事を考える。

ユースワークとコミュニティ

若者はコミュニティから来る。若者の発達においてコミュニティは決定的な力を持っている。だから、ただ若者と活動してればいいというものではない。彼らがそこに毎日帰っていくという事を忘れてはいけない。だから社会に変化を起こしていかないといけない。ソーシャルメディア・地域のイベントへの参加・地方行政を通しての政府の政治的な活動への従事など、コミュニティを形作っている物を見ないといけない。だからコミュニティワークが重要となる。そしてエンパワメントはコミュニティから得られる。だから、ユースワークはコミュニティと密接な関係がある。

振り返りの重要性

ユースワークの授業を提供する時、若者にどれだけのプログラムを提供したとか、どんな経験をさせたとかは関係がなくて、その過程において、振り返る時間を提供し、プロセスについて考える時間を設ける事を大事にしてほしいということをよく言う。もしそれがなくただ活動ばかりをしていたら、若者は自分について考えたりし、成長や発達をする機会を失ってしまう。プログラムで旅行に若者と行くのは簡単だが、振り返りがなければ、ただ疲れて帰ったらすぐ寝るだけになってしまう。だから、振り返りの時間を持つ事は非常に大事。

カリキュラム志向に対して

ユースワークのカリキュラム化は、良い事だと私は思う。市民が私たちワーカーが何をやっているのか理解できるから。ただ若者と話しているだけだと、果たして何をしているのか？と市民は考えるのが普通だろう。しかし今やユースワークはプロフェッショナルとして広く認められており、雇用対策にも効果があると認識を得ている。市民はどのセンターやどの実践が良いというのを容易に知れるようになった。そして今はユースワークは明確な考えがあり、成果の基準があり、それが目に見え測れる。だから政府が調査に来た時も、ミッション、プログラム、評価、成果、コミュニティのニーズ等を示すことができ、ビジネスアプローチができるようになった。

■ユースワーク・若者支援の中間支援組織

1. Parthnership for Young London

概要

Parthnership for Young London(以下 PYL)はロンドンのユースサービスや若者に関するサービスを、中央政府・地方政府・ボランタリーセクターとの連携を通して促進し改善する事を目指している。具体的な事業は、①政策や実践のブリーフィング②トレーニングやセミナー③コンサルタント④地域でのフォーラムの機会の提供⑤実践を共有する機会の提供などである。

PYL が始まった背景

PYL は 2005 年に始まった。これは偶然ではなく、Youth Matters が出た年。異なるセクター(ボランティアセクター、コネクションズ、地方政府など)の多くが、ロンドンにおいてそれをまとめる中心的な組織がないという事を問題として挙げていて、これらをコーディネートする機関が必要だと認識していた。私たちの仕事は、パートナーになった組織と、それ以外の若者系組織にサービスを提供する事。ロンドン以外 9 つの地域には Regional youth work unit というのがあり、ここに似ている仕事をしている。しかし、予算カットによって今は 6 つに減った。

具体的な事業

パートナーになってくれた機関に集中的なサポートを行っている。具体的には毎週金曜日に、最近の政策の動向、資金、ユースワーカーとしてのトレーニング、若者向けのプロジェクトに関する情報のメールを流す。その他には、セミナーを開催している。トピックは、私たちがワーカー達に知ってほしいと思う事と、パートナーシップのメンバーから提案されたものがある。最近行ったセミナーは、若者を雇用と訓練にどう巻き込むかに関して。

政権交代後の若者政策

労働党の時は、1つ1つに対してしっかりお金がついていたが、保守党に変わって、「これがあなたたちが使えるすべてのお金なので、この中でやりくりをしてください。」というシステムになった。もちろん合計金額も少なくなっている。ユースサービスは強制ではないので、自治体によっては廃止や縮小する所がある。子どもへのサービス等に比重をかける傾向があるため、ユースサービスはカットされやすい対象となる。コネクションズも自治体委託になってからは継続しない事を決めた自治体が多くみられるようになった。その代わりとして今自治体が担わなければいけないのは IAG である。IAG は健康、雇用、家、いじめなど、問題を抱えた場合どこに行けばいいのか分からない若者が多いので、それに対応して情報提供等を中心に行う政策。

政権交代後の市民の動き

最近では、choose youth(<http://chooseyouth.org/>)というユースワークの資金を削られていることに対してのデモグループが発足した。このグループの構成員はユースセクターを代表する会議などに多く出席している。

若者の参画政策

若者の参画は今やメインテーマではなくなっているが、政府はナショナルシティズンサービスにより若者をアクティブに社会に関わってもらおうとしている。理念は良いが、しかしこの部分は DofE が長い間やってきた。そして、なぜ 16 歳限定の活動で多くのお金を使うのか。他にも多くのユースワーク関連団体はこれらの部分の活動に関しては自分たちが長い間展開してきたことだと思っている。政府やナショナルシティズンサービスをパイロット事業として、来年もさらにお金をさらにつぎ込もうとしている。とても残念である。

ロンドンにおける若者政策の構造

残念ながら、ロンドンには若者政策の綺麗な構造はない。自治体により、ユースサービスの部門を持っている所もあれば、いくつかはコネクションズだけ、いくつかはコネクショ

ンズと若者の妊娠など、自治体におけるニーズや関心によって違う。

■ユースワーク・若者支援の中間支援組織

2.London Youth

概要

ロンドンにおける若者やその家族を支援している 400 の団体を支えるネットワーク組織。若者支援組織がより良い活動を行えるために支援を行い、ユースワーカー養成のトレーニング、情報を提供するとともに、London Youth Quality Mark(若者に対するサービスが彼らのニーズに基づいているかなどの成果を測るアセスメント。City and Guilds から認められている)を使ったサービスの向上をし、自らが所有する活動センターにおいて、実際に若者とも直接働いている。

中間支援組織の存在

イギリスには地方において、そこでのユースワークを支える団体があり、London Youth はロンドンでのそれに相当する。例えば他の地域では、Kent Youth や Devon Youth がある。これらの組織はユースセンターをサポートする。繋がりを生み出す。それがあることによってより強くなる。私たちが存在している理由は、ユースセンターやユースワークがより良くなるように支援するためである。例えば Quality Mark というセンターが若者にベストなサービスを提供しているかを測るツールがある。これは City and Guilds から認められたもの。他の組織はこれによって、このユースセンターの質を認められたという名声を得られる。

ユースワーカーのトレーニング

トレーニングの内容はレベルによる。導入では、ユースワーカーとは何なのか。プログラムを計画する時のやり方などを教える。ユースワーカーとして、例えば、旅行や映画に連れておく際に、なんでこれをやっているのか、その目的を考える必要がある。このような活動の後に、例えばディスカッションの機会を持ち、チャレンジの機会を与えたりする考える機会を提供したり、彼らのマインドを刺激する事が必要となる。ユースワーカーとして、なぜこの活動をやっているのか、そしてどうやったら意思決定の機会に関わらせることができるかを考えなければいけない。例えば、若者が海に行きたいと言う。その場合ユースワーカーとしての対応の一例としては、「全然いいよ！でもそのためには君がバスをチャーターして、リスクマネジメントもしっかり考えなきゃいけないよ。もちろん私も助けるからね。」とか。若者によっては、ワーカーからの支援なしで自分たちで活動を進めていける所もある。アドバイスにもバランスが必要。ユースワークは「なぜ？」を大事にしないといけない。さもないとただのベビーシッターのように世話をしているだけになってしまう。

ユニバーサルとターゲットアプローチ

ユースワークは最近お金が削減されていて、さらにターゲットへの傾斜がある。若者の犯罪やギャングや妊娠など。私はユニバーサルアプローチに戻りたいと思っている。なぜならもしユニバーサルだったら、上記のような特定の問題を持った若者のニーズも満たせる。

ユースワークの成果の測定

ユースワークの成果にはソフトとハードがある。ハードは人数などで、ソフトは例えばどれだけ自信をつけたかなど、若者へのインパクト。シンプルなのは、始まりと終わりにアンケートをする事。インパクトを測りたいのなら、彼らには話しかけるしかない。ここ数年で、成果を測ることをより求められるようになってきた。しかしユースワークは自発性が大事。ユースワークはとても危機的な状況にあると言える。



【London Youth の外観】

【パートナー団体を示す地図】



【ミッションステートメント】

【受付】

■若者の参画を進める取り組み

3. Duke of Edinburgh(DofE)

概要

イギリス全土で、14歳～24歳の若者向けのプログラムを提供しているチャリティー団体。どんな状況に置かれた若者でも自分たちの可能性を発揮できる世界を作っていくために活動をしている。400の団体の協力を得て、ブロンズ・シルバー・ゴールドの3種類の体験プログラム(達成難易度がそれぞれ違う)を提供している。プログラムには①volunteering②physical③skills④expedition⑤residentialがあり、参加者はこの中から1つを選ぶことができる。

歴史的発達

1956年から始まり、今は136の国にプログラムが広がっている。インド、オーストラリア、カナダも行っている。インターナショナルレベルで話されている。このプログラムは単純なスキームでバランスが取れているから受け入れられやすかった。

1950年代は、若者のギャングや反社会的な行いが多く存在した。また第二次世界大戦後は、若者の発達を促進するのに非常に難しい時期であった。戦後たくさんの人が帰ってきて、兵隊が先生になって生徒に暴力を行う事件が多くあった。肉体面での若者の荒廃が目立った。それに対応した形で、時代の流れと活動をうまくリンクして、資金などのサポートを得るようになっていった。

今も肉体面での若者の成長を支える分野はあるが、流れとしては個人的社会的発達を支援する活動にシフトしている。若者にとって大きな経験となる。異なる世界で体験を試みる。これはDofEの持っている大きなインパクトの1つ。

プログラムの特徴

このプログラムの特徴は、活動を雇用や大学、カレッジと結びつけている事。もし若者がDofEをやり遂げたら、カレッジ・大学・雇用へのより良い機会を得るのである。大学やカレッジは若者のこのような経験を評価する。大学やカレッジは競争が激しい。多くの若者が同じコースにひしめきあっている。だから入学を決める時とかは学業だけではなく、他の情報なども考慮される。その1つにextracurricular activityと呼ばれるものがあり、学校外での活動や活動が、大学などへ入るのを手助けしてくれる。多くの人々は大学に入るのに必要な資格を持っており、このような場合にこのextracurricular activityが大事になっている。

私たちは若者に機会を提供する事でリーダーシップを育んだり彼らが次のステップに行くために必要な機会や技術を発達する機会を提供している。イギリスは教育をアカデミックな面だけじゃなくもっとホリスティックに見ている。若者が雇用や大学に着く時、何かの資格を持っていると有利になるが、その時にさらにこのDofEの資格を持っているとよりパワフルになる。DofEが有名になった理由の1つとして、アカデミックな面を補完しているからと言える。

活動資金

チャリティー団体。地方政府を通して、政府からお金をもらっている。従って我々はパブリックワーカー。これは非常に大きな違い。政府が DofE の重要性を認識している。賃金だけではなく、プログラムに必要な予算も政府が出してくれる。

政府が重要性を認めるに至るまで

若者へのインパクトや、変化の結果を政府に見せ続けてきた。例えば非常に悪い立場にいた若者が、これを通して、変化し、発達し、より良い市民になっていく結果をまとめ、提出してきた。

この活動が経済的にどれくらい価値があるものなのかも示している。これは若者や我々には意味はない事だが、政府からや個人単位でお金をもらっているのだから、いかに価値があるものなのか、お金を与えるに値する事なのかを示している。ある種のビジネス。

学校との協働

学校との協働を促進するには学校のプログラムと繋げる事が必要。そのためには、社会的な認識を得ないといけない。最近では学校側に生徒のすべての側面を見なければいけないというプレッシャーがある。成績だけじゃなくて、若者が疲れているならなぜ疲れているのかを見なければいけなくなっている。家庭で起こったことも把握しなければいけない。だからそれらを補完する視点で、学校側が DofE を使う事もある。しかし依然として学校側は難しく、ユースセンターの方がいくぶん簡単である。

たくさん学校と協働しており、ロンドンのすべての区と一緒に働いている。各区の DofE の担当の人が学校に行って宣伝したりする。世間に DofE=グッドなアクティビティという評判がある。だから人々は名前を使いたいし、参加したいと思っている。この状態に持っていくまで長年かかった。

社会的な問題に関心がない若者へのアプローチ

まずは関係性を築く事から始まる。スヌーカーをしたり話をしたりする中で、段々と活動に巻き込んでいく。関係性を築くのは時には長いスパンかかる場合もある。ユースワーカーの特性によってこの関係性の築き方やアプローチも変わってくるので、チームとして若者と働く。

社会の問題はとても重要だが、若者は興味がないかもしれない。しかし、スポーツや、音楽、ファッションのデザインなどは興味がある若者が多い。これらへの活動は若者に良い影響を与える。これらの中で、それぞれの若者が、社会に対して働きかける際、どのような態度を持って取り組むか、見る事ができる。

■若者の参画を進める取り組み

2.Youth Action Group

概要

Youth Action Group(以下 YAG)カムデン区における若者組織。メンバーは 78 人で、地域ごとに 3 つの若者グループを形成し、若者向けプロジェクトに対しお金を与えるか与えないかを決定し、その後もお金がしっかりと使われているかを監査する事をメインの活動としており、その他にキャンペーン活動を行っている。

Youth Opportunity Fund(以下 YOF)

YOF は区によって運営のされ方は異なり、カムデンでは若者の企画に何円を与えるかを決めている。プロジェクトには最高で、5000 ポンド(道具や設備には 1500 ポンド)他の区では、お金がこれより少なかったり、1年に3つの企画にだけしかお金を与えられなかったりする。YOF は5年のプログラムなので今年の3月に終わった。このコンセプトはみんな大好きで続けたいと思ったが、お金の関係で、YOF の予算を他の所に回さなければいけなくなった。しかし、YOF の概念は YAG へと受け継がれた。

YAG の取り組み

YAG は3つのグループを形成(ノース、セントラル、サウス)し、若者が若者のプロジェクトに対してお金を与えるか与えないかの権限を握っている。サウスとノースでは社会的な問題が違って、サウスは人口密度がとても高く、騒音やギャング、アルコール、ドラッグ、などの問題がたくさんある。一方ノースはリッチで、しかし子供や若者の数や遊び場が少ない。YOF はカムデンに1つしかなかったが、このような問題の違いに対応するために3つのグループにわけた。YAG では YOF の概念を引き継いで、若者が何か地域の課題解決や、何か地域に貢献する事への活動にお金を使いたいと申込み、それにお金を与えるかどうかを同じ若者が決められるようにしている。YOF は政府の事業だったので、その成果をレポートする必要があったが、今はその必要がなくなった。

YAG の活動として、上記以外に、若者プロジェクトの調査員としてのトレーニングの機会も提供している。お金を与えた若者には、定期的にそのお金がしっかりと目的通りに使われているかどうかをチェックしなければいけないので、若者が監視している。お金を与えるかどうかの判断、そしてお金がしっかりと使われているかどうかの監査を若者が行っている。今年は、トランポリン、ロッククライミング、グラフィックプロジェクトを調査した。

YAG のメンバーは 78 人だが、コアメンバーは 10 人くらい。若者は忙しいので、他のコミットメントもある。だから、ミーティングに絶対来なければメンバーになれないとするのではなく、彼らの自由意思に基づいて行っている。

カムデンの若者政策

カムデンがとても優れた若者支援を展開できている理由は、ボランティアセクターをとっても重視している。別々に働くわけではなく、パートナーシップがとても良い。自分たちだけを頼りにするのではなく、他の組織でユースサービスをできる所を頼っては、協働をしている。これが違いを作っていると思う。なぜなら公的な機関は何かをする際にバリアがたくさんあるが、ボランティアセクターはより柔軟に、私たちが手の届かないところをやってくれる。だからパートナーシップは大事。私たちができる事、そして、ボランティアセクターができることを合わせたらすべてができるのである。ロンドンは区によってパートナーシップを取り方が違っており、**Every Child Matters** でそれは義務付けられたが、弱いパートナーシップの区もある。カムデンはベスト。

参加の共通認識

カムデンでは、「参加」とはただ自分たちの楽しさのためではなく、社会や他者へ貢献や利益を持つものであるとの共通認識を持っている。

■若者の参画を進める取り組み

1. Camden Youth Council

概要

若者の声を社会に届け、意思決定への参画を目的に、選挙に選ばれた 13 歳～18 歳の若者によって構成される、カムデン区を代表する若者の代表組織。ここでは若者に関連する問題に関して話し合い意思決定が行われ、実際の政治に反映をさせる活動をしている。

ユースカウンシルの役割

彼らに大人への移行に向けて準備の機会を提供する事を目標に活動をしている。それを意思決定への参加によって行っている。今のユースカウンシルは、リーダーの MYP が 1 人、サブリーダーの Deputy が 2 人。これらは選挙で選ばれる。MYP は実際にカムデンの議会に席を持つ。学校と協働してこの選挙を行っているが、すべての学校が参加しているわけではない。面白いのが、選挙自体も若者によって行われているという事。学校の若者をいくつか集めグループを作り、その若者を対象に選挙を行う際のトレーニングを提供する。他の区ではユースワーカーや教師がこれを行うのに対して、カムデンでは若者が若者の選挙を行う。

立候補者にもトレーニングを行う。最初のセッションでは、MYP とは何なのか？何を期待されているか？何を得られるか？メディアとの付き合い方などのトピック。彼らはスピーチや新聞、テレビにも出演する事もある。そして各候補者はマニフェストを出す。紹介用のビデオも作る。選ばれた場合、MYP はより多くのトレーニングを受ける。

ユースカウンシルは、若者に大人への準備の機会を提供し、意思決定のプロセスに参加

する事を重要性に気付くということを大事にしている。なぜ意思決定の機会が重要かと思うかというと、明日の次世代を担っていくのは若者だから、それに準備する機会を社会の中で与えなければいけない。また、社会は様々な意見や人によって構成されている。すべての声が聞かれなければいけない。白人に向けての政策を作っているのにその過程に白人が声を持っていないなんてことはおかしい。これは若者も同じ。公共のお金を使っているのなら、そのお金がどう使われるのかすべての人が声を持たなければいけない。

実際に起こした変化

夏休みは、みんながホリデーを取るからほとんどのユースセンターは休みになる。しかしユースカウンシルは議会に、何人かはホリデーを取るが、ほとんどはそれを取る余裕がないか、取っても1週間か2週間であると伝え、ユースカウンシルは、ユースセンターをオープンしてほしい、そして夏休みの間行う事ができるプロジェクトを提供してほしいと議会に伝えた。この結果、実際にすべてのユースセンターではないが、いくつかはオープンしプロジェクトも提供するようになった。このプロセスにはたくさんの若者が参加した。

他にも、議会レベルではなく、若者へ直接色々な事をやっていて、例えばタバコを吸う若者に向けてキャンペーンや、地域の大人に迷惑をかけている若者に話を聞いて、それをやめるようにコンタクトを取ったり。MYPとDeputyは今ユースカウンシルの投票を電子投票で行いたいとカウンシルに訴えかけている。

また、このMYPとDeputyは最近カムデン議会の新しいボス(チーフエグゼクティブ)の候補者を選ぶ際の逆面接を行った。ちなみにユースカウンシルを担当するユースワーカーも、若者に逆面接をされる決まりになっている。これはイギリスではかなり共通で行われている。

いくつかの若者は、ユースクラブへ行って、ユースセンターの活動を評価することもある。カウンシルには色々な役割があり、色々な貢献の仕方がある。

このような若者を組織する仕事をするためにはコミュニケーションスキル、若者をモチベートする、アクティビティと彼らの興味を繋げる、若者を社会に一部にするんだという決意、それと忍耐が必要となる。



【カムデンユースカウンシルの様子】

※ユースカウンシルのミーティングの様子 2011年10月19日

●参加者

サム(コーディネーター)

ラシッド (ユースカウンシルのヘッド)

若者 16人(MYP と Deputy を含む)

●議題

ロンドンでの暴動が以後起こらないように以前メンバーで考えた解決策にプライオリティをつける。

●内容

前回のミーティングで暴動に対してそれを今後防ぐためにどのような対応をしていくかをブレストし、6つのカテゴリー(教育、コミュニティの安全、警察、ユースサービス、メディア、キャンペーン)に分けた。今回のミーティングではこの中からプライオリティをつける。

若者からは、

1 ユースサービスを増やす

2 若者に、彼らの考えを表現したりや異なる意見を聞く機会を提供する

3 警察とのコミュニケーションの機会を増やすことにより、若者の寛容性を高める

4 若者向けサービスの予算を確保する

5 ユースセンターの閉館時間を延ばす

が挙げられ、ここから投票を行い、上から、2票、2票、3票、1票、4票という結果になり、上位2票のアイデアを議員や警察官など、中心に実際に政策を動かす力を持っている人の所まで持っていこうという決定に至った。